

ヒマラヤ

No.380



2003 JUL



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAI

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

ヒマラヤ登山の課題の一つとして縦走があげられるが、このティリッチ・ミール西峰Ⅰ峰(7,487m)、Ⅱ峰(7,450m)、Ⅲ峰(7,400m)、Ⅳ峰(7,338m)と続く2kmの稜線は面白い課題である。写真はティリッチ・ミールより望む西峰Ⅰ。

(文・写真：野沢井 歩)

ヒマラヤ No. 380

1. ハリシュ・カパディア氏に英国王立地理学協会ゴールド・メダルが贈られる
3. ロー・マンタンの空、遥かなり(11) 高橋 照
10. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
12. 西藏登山の和文参考資料一覧(1979年開放以後のもの)
24. 寸感・事務局日誌

ハリシュ・カパディア氏に英国王立地理学協会ゴールド・メダルが贈られる

ロンドンにある英国王立地理学協会は、今年度の後援者ゴールド・メダルをインドのハリシュ・カパディア氏へ授与することを決定した。

創立者メダルは1830年から、後援者メダルは1838年からの授与を行っている。

1831年、当時の英国王ウィリアム四世により、55ギニーの年次賞が設けられた。1839年、協会はその賞金を同価値の二つのゴールド・メダルに変えるべきと決断し、創立者メダルと後援者メダルとなった。両メダルとも、英国女王により承認され、氏のヒマラヤにおける地理学的発見及び山岳活動への貢献が認められたのである。

今回のメダルは、協会の二つのゴールド・メダルのうちの一つで、最高の賞にあたる。授与式は2003年6月2日に行われる。この日は、奇しくも英国女王即位50周年記念日で、また、エヴェレスト初登頂50周年の年でもある。

ハリシュ・カパディア氏は、今回の受賞を彼の次男で2000年11月11日、カシミールで戦死した、ナワン・H. カパディア中尉(インド陸軍第二コル



カ・ライフル部隊、第四歩兵大隊)に捧げる意を表し、以下のコメントを寄せている。

『息子と私は、トレッキングへの情熱、自然への愛情を共有していた。彼はヒマラヤを守るためにその命を捧げた』。

インドを含むアジアからの受賞は、1877年のパンディトのナイン・シン氏以来二人目で、実に126年振りの受賞者となった。

王立地学協会 (RGS) ゴールドメダル授与の登山家・探検家

1866年 Dr Thomas Thomson

1850年、フーカーと共にアッサム調査。

1872年 Robert Show

1839年生れ、イギリス人。ヤングハズバンドの伯父。カングで茶店経営。カシュガル、ヤルカンドを訪れ、通商条約締結に尽力。批准した条約文を届けた。ビルマのマングレー弁務官。

1873年 Ney Elis

1844年生れ、イギリス人。黄河新流路の測量。シベリア横断。新疆、パミール、アフガニスタン探検。

1883年 Sir Joseph Hooker

1817年生れ、イギリス人。植物学者。南極探検。ネパール東部、ベンガル東部探検。

1890年 Sir F. E. Younghusband

1863年生れ、イギリス人。中央アジア横断。シ

ャクスガム溪谷探検。パミール探検。チベット進駐。白人として初めてK 2北面を見る。

1892年 Edward Whymper

1840年生れ、イギリス人。マッターホルン、グランド・ジョラス初登頂。チンボラソ初登頂。

1898年 Dr Sven Hedin

1865年生れ、スウェーデン人。中央アジア、チベット、西トルキスタン探検。

1901年 HRH Duke of the Abruzzi

1873年生れ、イタリア人。1909年K 2試登。アラスカ、セント・エライアス初登頂、ルウエンゾリ最高峰初登頂。北極圏探検。

1903年 Douglas Freshfield

1845年生れ、イギリス人。カンチェンジュンガ一周。カフカズ探検。ルウエンゾリ、カナディアン・ロッキー探検。日本アルプスにも来訪。

1905年 Sir Martin Conway
1856年生れ、イギリス人。カラコルム探検。コンコルディアの命名者。

1910年 Col. H H Godwin-Austen
1834年生れ、イギリス人。インド測量局勤務。カラコルム測量。バルトロ氷河からK 2へのルートを発見。氷河にその名を残す。

1915年 Dr Filippo de Filippi
1869年生れ、イタリア人、アブルッツイ公のアラスカ、アフリカ探検に随行。カシミール調査。

1916年 Copt. F. M. Bailey
1882年生れ、イギリス人。ナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリを発見。青いケシの発見。

1922年 Col. C. K. Howard-Bury
イギリス人。旅行家。ヤシンで現地人に殺害される。

1925年 Brig-Gen C. G. Bruce
1896年生れ、イギリス人。1922、24年北面エヴェレスト隊員。8,290m到達。グルカ連隊勤務。

1926年 Col. E. F. Norton
1884年生れ、イギリス人。人類初の八千メートル到達者。北面8,572m記録保持者。陸軍中將。

1927年 Major Kenneth Mason
1887年生れ、イギリス人。ヒマラヤン・クラブ創立会員。インド測量局勤務。シャクスガム渓谷探検。14年間ヒマラヤン・ジャーナル編集長。

1928年 Dr Tom Longstaff
1875年生れ、イギリス人。1907年トリスル初登頂。シェアチェン氷河発見。

1930年 F. Kingdon-Ward
1885年生れ、イギリス人。博物学者。ヒマラヤンクラブ創立者。南東チベット、北東アッサム中国、ビルマ国境を探検。

1932年 HRH the Duke of Spoleto

1934年 Hugh Ruttledge
1884年生れ、イギリス人。1936、38年エヴェレスト隊隊長。ナンダ・デヴィ探検。

1938年 Eric Shipton
1907年生れ、イギリス人。北側エヴェレストへ4回。カラコルム探検。パタゴニア探検。

1952年 H. W. Tilman
1898年生れ、イギリス人。1936年ナンダ・デヴィ

初登頂。1950年ネパール・ヒマラヤ探検。

1954年 Lord John Hunt
1910年生れ、イギリス人。1953年エヴェレスト初登頂隊隊長。

1956年 Sir Charles Evans
1918年生れ、イギリス人。1954年カンチェンジュンガ初登頂隊隊長。1953年エヴェレストの南峰に到達。

1957年 Ardito Desio
1897年生れ、イタリア人。1954年K 2初登頂隊隊長。アフリカ、中近東、カラコルムで地理学地質学調査を行い12回の遠征隊隊長を務めた。

1958年 Sir Edmund Hillary
1919年生れ。ニュージーランド人。1953年エヴェレスト初登頂。

1974年 Sir Chris Bonington
1934年生れ、イギリス人。1970年アンナプルナI南壁、1975年エヴェレスト南西壁の二つの壁の初登攀を成功させた隊長。いずれも犠牲者有。

1982年 Michael Ward

1999年 Doug Scott
1941年生れ、イギリス人。1975年エヴェレスト南西壁初登攀。詳細はヒマラヤ378号参照。

2001年 Reinhold Messner
1944年生れ、イタリア人。1986年八千メートル峰14座登頂。80年エヴェレスト無酸素単独登頂。

パンディット、ナイ・シンのラサ密行

1865年1月12日、北インドのディラドンを出発。ネパールのカトマンズに3月7日到着。ランタン谷近くのキーロンからラサを目指すべくシャブルーに滞在し画策したが一度目は失敗。ムクチナート経由も失敗して、再びキーロン経由を目指す。8月13日キーロンを出発。[編注：1996年から3度この地を訪れたが、ここがチベットかと目を疑うほど緑豊かであるが、北のゲン辺りからは不毛の地となる] 8月30日、ヤル・ツェンポーに着く。ラダーク人と一緒になり10月3日、東へ向かう。29日シガツェ着。12月31日ヤムドク・ツォ到着。1986年1月10日ラサ到着。4月21日ラサを離れ、6月17日マナサロワール湖のダルチェン着。26日にヒマラヤを越え10月20日ディラドンに帰着した。

ロー・マンタンの空、遥かなり(11)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

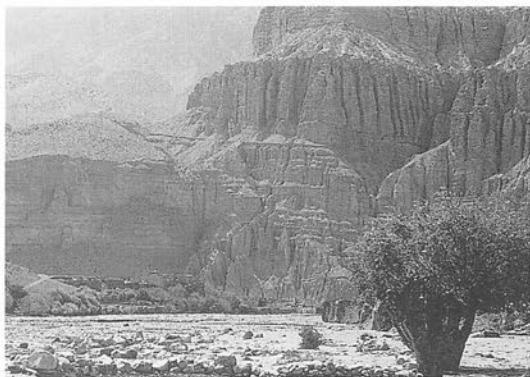
高橋 照

ツォーナム (mtsho gnam) の泊まり場にあるバッチィになっている民家は、一世紀も前から建てられていたものと判断される。ここは、テ(タン)の一寸手前にあるところだが、テに行く道は、ナルシン・コーラの左岸に、チュクサン(ツク)より立派な道がつけられているので、テに行く道ではない。ツォーナムの宿場の背後にそびえる砂岩の大岩壁に道がつけられ、丁度テの集落を真下に見下ろせる附近で、礫岩と砂岩の急峻な尾根へと道は続いている。この尾根道は、これから私達が辿るタンゲやデーやヤラに向い、やがてロー・マンタンに通じる間道である。ほとんどデーやヤラの人達だけが使っている道で全く人通りはない。

ロー・マンタンに通じる本街道は、また別にある。チュクサン(ツク)よりカリガンダキを30分程遡行すると、岬のように河原に張り出した砂岩の尾根の末端につく。そこにはトンネルが掘られて、カリガンダキ本流の水を通してている。この水門は乾期には水を流していないが、雨期に入るとカリガンダキの河床が増水し、対岸に渡ることが出来なくなるので、このトンネルに水を流し、カリガンダキの河原の渡渉を容易にしている水門なのである。水門の前の橋(雨期にはこの橋の下は奔流になってしまうが、乾期には橋は外されてしまう)を渡り、カリガンダキの河原に架けられた板を渡した橋を渡ると、サムマルより流れて来る小谷の入口に達する。馬道は涸沢になっているこの小谷を登るが、一般路は河原の上50メートル程の高さの河岸段丘上に続いている。そして、河岸段丘上にある小村がチャイル(チャイリー、チベット語でツェレtse le)の集落である。チャイルよりは大岩壁の山腹に羊腸たる小道が登っており、その途中から左には谷一つをへだててギャーカ

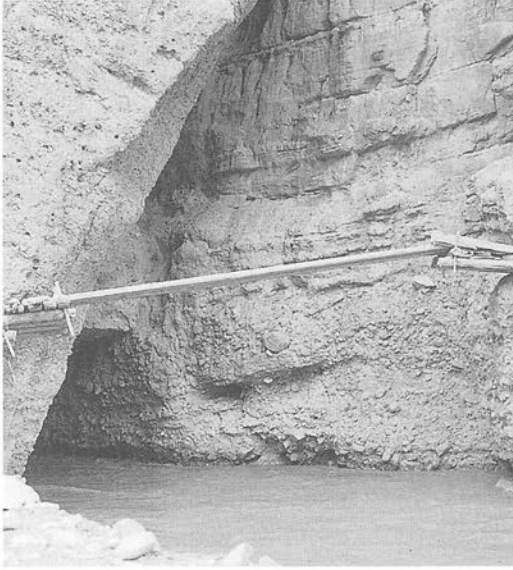
(チベット語でゲーカge gar)の小村が見られる。そして登りついた処が、サムマル(チベット語でサマルsa dmar)の小村で、この小村三つが一村に数えられて、バーラ・ガウン(12カ村)の一村を構成しているのである。そして、サムマルの村を最後として、カク地区は終り、ギリン(gi linまたはgi lun)からはロー地区のアッターラ・ガウン(18カ村)になるのである。ローの主都ロー・マンタンには、普通この道を通り、ガミー(チベット名ゲミge mi)、チャラン(チベット名ツァランtsa ran)を経由して行くのが一般的なので、ムスタン街道と呼ばれている所以である。

バーラ・ガウン(12カ村)とはどんな村の集合体なのだろうか。私は今までに、南よりテラ・ガウン(13カ村)、即ち、タック・サート・サエ(タック七百)について、パンチ・ガウン(5カ村)のことについて述べた。バーラ・ガウンはその北に続くカク・パ(カクの人)の村の集合体で、カク・パと呼ばれる純粋なボテの住む地方である。言葉は勿論チベット語であるが、カク方言を使い、宗教は仏教(ラマ教)とボン教(Bon-po)である。その名称は、

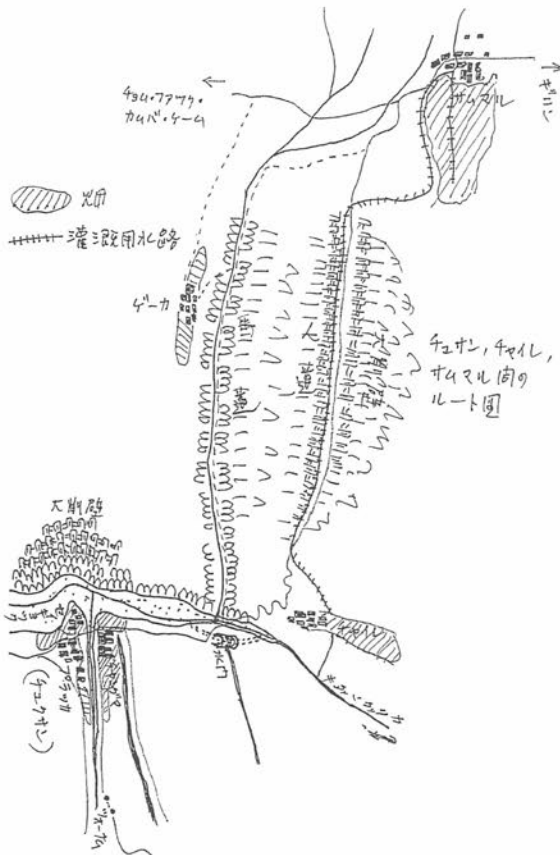


▲ツォーナムの泊場付近

▼トンネルの水路（雨期）



- (1) カグベニ (Kagbeni) 本来のチベット名はカク (bkag) でブロックという意味である。
 (2) ダンガルジョン (Dangsarjong, dan dkar rdzon)



▼トンネルの水路（乾期）



- (3) ファルク (Phalk)、パンリン (Pangling)、シャンガタまたはサングダ (ShangtaまたはSangda、サンクタ (Sankta) が正しいという人もいる)。小さいので3カ村で1村とする。
 (4) ツクまたはチュクサンあるいはチュサン (Tshug, Chhuksang, Chhusang、ツクはチベット名、チュクサンはネパール名、又、ツクサン (TsuKsang) はグルン名)。
 (5) テあるいはテタン (TeまたはTetang、テはチベット名)。
 (6) ギャカ (Gyaka) またはゲーカ (Geka、ge gar)。チャイレまたはチャイリー (ChaileまたはChaili)、チベット名ツエレ (Tse le)。サムマル (Sammar、チベット名サマル (Sa dmar)。小さいので3カ村で1村)。
 (7) ジョング (Jhong、チベット名はDzong)。
 (8) ツェンクール (Tsenkur)。
 (9) プタック (Putak)。
 (10) プラング (Purang)。
 (11) ジャルコットまたはチャルコット (JharkotまたはChharkot、チベット名はDzar dzar)。
 (12) キンカまたはキュンカ (Khinka、またはKhyunka)。あるいはケンカール (Kyang-Khar、dkyil mkhar)。

の12カ村である。

バラ・ガウンの主都はジャルコットで、ムクチナートの1時間ぐらい手前の城廓都市で王城跡がある。現在ネパール政府発行のトレッキング・パーミッション (旅行査証) で入れる村は、12カ村の中、(1) のカグベニ、(2) のダンガルジョン、(3) のファルク、パンリン、サンクタ、(10)

のプラング、(11)のジャルコット、(12)のキンカの6カ村だけである。主都のジャルコットやその北にあるジョングには、クタック(Kutak)と呼ばれるようなカーストの高い人が住んでいる。クタックはペンブー(Pembu)とも呼ばれ、領主にあたる人で、ムスタン内では王族と結婚することができる身分である。Kuは身分、TakはGoodに相当する。

ツォーナムに着いたのはまだ2時を少し廻った頃であったので、ポーターの背負って来る天幕の着くまで、私達は河原で遊んでいた。そこにコックのニマがチュクサンに住んでいる一人の男を連れて来て、

「この人が良い馬を持っている馬主です」といって私に紹介した。この辺では珍しいくらいの立派な服装をして、今カトマンドゥで流行の踵の高い新しいブーツを履いていた。なかなかの金持ちらしい。ニマは、

「これからは険しい山岳地帯に行くので、馬も良い馬でないと、つぶしてしまうので、この人の馬なら大丈夫だというので連れて来ました。値段が凄く高いことをいっているんですが？バラサーブどう致しましょう」。

「一体いくらなんだい」

「二百五十びた一文もまからないといっています」「そりーや、高過ぎるよ」、私は腹の中で円値に計算しなおした。日本円で馬1頭1日5千円ということになる訳だ。

「じゃー、二百で手をうとう」、すると馬の持ち主は、

「この馬は、去年のヨールトンのお祭のとき、ムクチナートの馬の品評会で、カクで一番と折紙をつけられた馬です。値段も2万5千ルピーで買った馬なので、とても二百ルピーぐらいではお貸し出来ません」

「……………」

「来年には3万ルピー以上になる代物です」、それを横で聞いていたタシは、

「馬を持って来てからの話だね」、とつぶねたので、明朝一番で連れてくるからといって、チュクサンに戻って行った。

やがて、ポーター達も集まって来たので、ツォー

▼チャイルの水門



▼サムマルの村



▼ゲーカの村とソバ畑をふかんする



ナムの河原には、色とりどりの天幕が張られた。リエゾン私達より百メートルも離れた下流に天幕を張った。お茶をわかすにしても、このナルシン・コーラの泥水は、大鍋にいっぱい川の水を入れて、1時間ぐらいたって、その上ずみを取ってお湯を沸かした。それでもコップの底が見えない程濁っていた。私は紅茶でなくてコーヒーにした方が胡麻化せるねといいながら、私だけはコーヒーにしてもらった。

前のバッチィから、絹のサリーを着た若い女が出て来て、川の水を汲みに来た。バッチィの女である。こんなところにどうしてサリーを着た女がいるのだろう。私は不思議に思ってキショールに、「あの女は一体何なんだい」と聞くと、彼は、「多分、トクーリーでしょう。流れ流れてこんなところに着いたのでしょうか、まだプライドだけは捨てていないようですね」、するとそばにいたタシが、

「ところが、あの女にリエゾンがえらくご執心で、ぞっこん参っているようですよ」、このように、リエゾンがしばしば脱線することは、私は何回かの遠征で知っていた。そういう場合、反って人間的で良い場合の方が少なくなかった。しかし、ビーム・バードルがと、思っただけで吹き出してしまった。あの小心もののビーム・バードルの何処に、そんな勇気があるのだろう。

「いっぺん、口説いてるところをお目にかかりたいもんだね」、とってふと思ひ当たるふしがあった。彼はチェットリーのタバ姓を名乗っている。同じ同族であるトクーリーなら、あるいは…。と思われるようになって来た。トクーリーは元来チェットリーと同様、武士階級であるが、本来はその昔北インドに王国を築いていたグプタ王朝の血を引いている一族である。そのグプタの息子がラージプートで、それがラージプート族の始まりである。そして、それがトクーリーだと名のり始めたのである。だから、トクーリーは元はといえばロイヤル・ファミリーなのである。ビーム・バードルがそんな深い歴史的なことまで考えてとは思わないが、同じインドアーリヤン系の人間とし

ての物の考え方だと、一応うなずけることである。

その夜メイン・テントの中では、これからの私達の行動について検討が繰り返されていた。

この隊はブリクティ登山隊として正式の許可を受けており、本来の行動目的である登山活動を当然第一と考えてこれまで進めて来たのである。だがしかし、もしロー・マンタンに入ることが可能であるならば、このツォーナムで隊を二つに分けなければならない。

6人の登山隊と、ジョイント・メンバーの2人の計8人は当然登山活動に終始すべきではあるが、TBSの3人と金子さんと、それに私を含む5人は、どうしても本街道経由でロー・マンタンに入らなかった。であるが故に、この5人は全く登山装備も持っておらず、私を除いて寝袋も夏物、下着類に至っては冬山用の毛の冬物下着は全く用意していなかった。私は、私なりに過去のムスタン入りから、この程度の着る物で充分と思われるものしか持って来なかった。私はカトマンドゥには八千メートル峰の遠征に充分なだけの装備や着るものを持っているのだが、それらは今回は全く不必要と考えて持って来なかった。金子さんなどは羽毛服もない始末である。

食糧などについても、私のカトマンドゥにストックしてある物を、ブリキの大トランク二つに入れて、隊が別れ別れになった時でも、主食だけ隊より貰えば困らないくらいのものを用意した。しかし、ジョムソムに於けるケサン・ナムギャル氏に対する扱いや、又、リエゾンの態度などから見て、ロー・マンタン入りは全く不可能に近いものと思われた。私達が勝手な行動をもしとったとしたら、



▲ギリンの集落



▲ガミー村の全景

登山活動も中断させられることは火を見るよりも明らかである。

ロー・マントンに入れなくとも、最初の計画通り本街道を通り、ギリン、ガミー、チャランを経由して、ドリーからヤラに入り、それよりデーをベース・ハウスにしてデー・チャン・コーラに入れば、登山隊でないこの5人は、80%は成功といえる訳である。私にとって、ドリー、ヤラ、デーの集落は未だ未知の世界であった。私達に許可されたキャラバン・ルートはブリクティに到達するための「エン・ルート・オンリー」という抽象的な表現である。リエゾンさえこのルートが「エン・ルート」と判断すればすべてがうまく行くのだが、堅物のビーム・バードルはウォーナムより、長い長い無人の尾根を縦走して、タンゲ村へのコースを考えているようであった。今になって考えてみると、恐らくビーム・バードルはジョムソムの警察で上司からこのルート以外は通すなど、かたく厳命されたものと思う。いずれにしても、明日のおたのしみというところではあるが、私達の希望しているムスタン本街道よりのアプローチは先ず駄目だと考えざるを得なかった。

一体このムスタン即ちローは、どんなところで、どんな歴史を持っているところなのであろう。ムスタンについての情報は余りにも少く、そして一般には全くつまびらかにされていない。

私は今回、行を共にした大正大学の金子さん(西藏語、チベット仏教)や、チベットのラサのロイヤル・ファミリー出身であり、ムスタン王国のロイヤル・ファミリーであるケサン・ナムギャル氏のレポートや口述に基づいて、その一端をここに記述することにした。

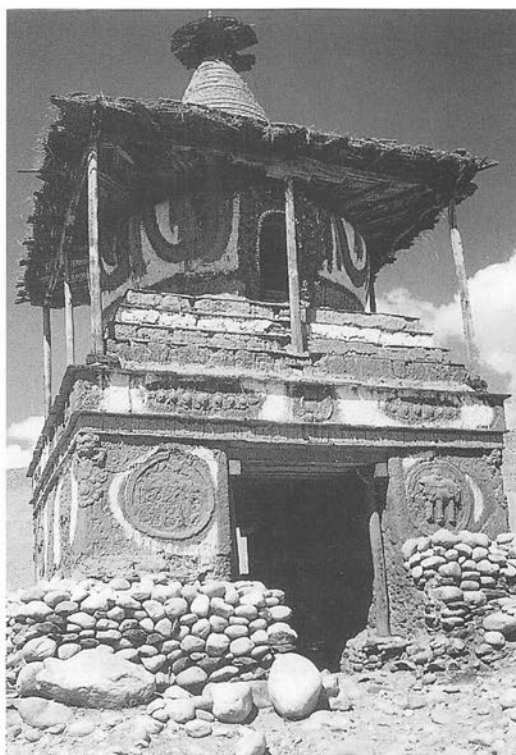
ロー(ムスタン)地区は、特殊な例外を除いて、長い間外国人立入り禁止のいわゆるリストラクト・エリアであり、現在でもネパール政府より入域の許可を得ることは、全く不可能な状態である。幸いにして、私は1977年と今回の1982年の2回に亘り入域出来たことは、有難いことだと思っている。

ロー(ムスタン)地区は、チベット語でローといわれており、モンタン(マントン)がこの地域の王が住む王城の町のことで、ネパールではムスタンと呼ばれており、地図名もムスタンになって

いる。ローは現在のネパールの行政区ではなく、以前はチベットのガリ(mgah ris, mgah, smad)に属していた。ローの地区名も、古くはロー・ボ(glo bo)という名で現れてくる。現在のムスタンの人々も自らをロー・ボ或いはロー・パ(ローの者)と称している。各種の文献に出てくるローのスペルは、glo (B0)、blo (bo)、klo (bo)、cho (bo)と記載され、モンタンは、smon than、sman than、mon than、mo sanと書かれている。

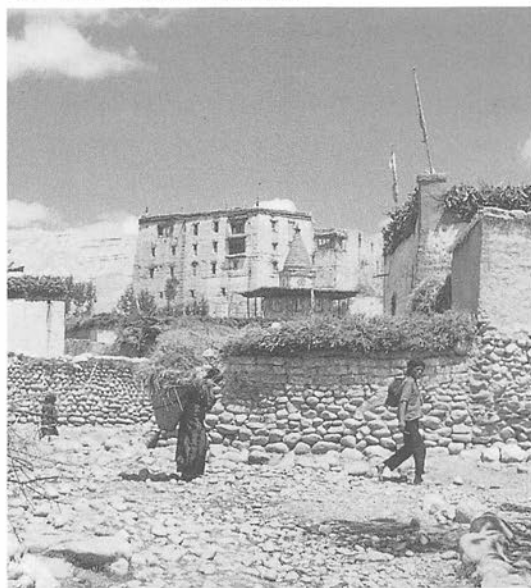
ロー地区に入って記録を残した最初の外国人は、明治の求道僧河口慧海師で、ツァラン(チャラン)に1年間も滞在し、その風俗、習慣を記録している。そして彼はここのゴンパでチベット語を勉強している。

ロー地区にある寺院は、サキャ派の分派ゴル派の寺が大勢を占めているとのことだ。ゴル派の開祖クンガ・サンポ(kun dgah bzhan po 1382-1456)がゴル寺を建立したその前後して、この地に布教したことから始まるという。その以前に寺があったのはニンマ派に属するものであったであろうことは、ニンマ派最初期の埋蔵宝の発見者サンゲ・ラマ(sans rgyas bla ma十世紀)が、ロー・ゲー



▲チャランの大きなチョルテン

▼チャランの集落と旧王城



ガル (glo dge akar) やその近くの岩山より二經典を発見したことから推論される。彼は北ネパールをさまよひ、多くの漢訳からチベット訳された經典(スートラ)などを発掘したとのことである。

ロー・マンタン王家に伝わる系譜書 (gdun rabs) は、以前は王宮にあったが紛失してしまったとのことだ。

ロー・ボ (glo bo) の王統を概説すると、法王ティレチェン (khri ral can) から次第に相続し、ムティツェンポ (mu khri btsan po) などの後世相続であるアマベル (a ma dpal) からロー・ボの王統が続いてきた。彼から法王アゴンサンボ (a mgon bzan b)、法王タシゴン (bkra sis mgon)、法王アモガ (a mo gha) と続いた。それよりは、アサンドルジェ (a bzan rdo rye)、アンゴンワンギェルドルジェ (an mgon dban rgyal rdo rye)、息子チョクタンパ (mchog dam pa)、チャムペルドルジェ (byam dpal rdo rje)、そして王子のタシニンポ (bkra sis snin po) の父子相続であるそう。

又、ロー・マンタンの仏教、宗教史、教団、寺院などは不明瞭なところが非常に多いので、今後の調査、研究が期待されているので、この地域の入域禁止を一日も早く解禁してもらいたいものである。

このロー地域は、ロートエ (glo stod) とローメ (glo smad) と種々の文献に現れる。ローメはチュミクギャツァ (ムクチナート) 即ちカク地区も含めていたこともあったようである。10世紀から11世紀の間に、ガリ (mnah ris) は、マルユル (mar yul)、グゲ (gu ge)、プラン (spu hrans) の王国があり、ロー・マンタンはタン・タン (kun than) に拠点を置くプランの王タシゴン (bkra sis mgon) に属して、トルボ (dol po) にも影響力を持っていたようだ。アマベルガトルボ、グゲなどに勢力を及ぼしていたことも知られている。あるいは、クンタンゾンカ (kun than rdzon kha) の支配者ハセティナムギェルデ (lha sras khri rnam rgyal sde) は、オエスン (hod srün) から、ペルコルツェン (dpal hkhör btsan)、タシツェクパ (bkra sis rtsegs pa) の系統を引き、ロー・マンタンの理論上の宗主権者であったといわれている。

サキャ派の寺は、ロー地区以外にも、トルボの各地にあった。また現在も、チュミクギャツァ (ムクチナート)、カク (カゲベニ) 等にもある。

特に地域的にみても、クンタン、マナン、ムクチナート、ロー、トルボが、その全域にわたって宗教的に流動的な関係が見られるのも面白い。

ロー・マンタンの王統についても、現在次第に明らかになってきているようであるが、その政治的組織、本土チベットとの関係など、その実情については現在のところ不明なことが余りにも多い。

政治経済的には、タック、ロー、クンタンそしてトルボとは何らかの関係が見られ、宗教的にもお互いに交流があるので、全域的な考察が必要であろう。特に西ネパールとのビヤス・ガルカのビヤシーの仏教や、マナサロワール周辺の僧院組織や寺堂の実際の現況を調べることによって、インドのラダク地域、ザンスカル地域の全ヒマラヤ地域全体と関連した政治文化を発見することが出来るであろう。

ツォーナムの泊まり場は、翌日もさわやかな朝だった。ナルシン・コーラの河原よりは朝もやが緩やかに立ち上り、ドロ柳の黄緑の葉の色が朝日に映えて美しかった。カリガンダキ右岸の例の大岩壁も、その赤褐色の肌を陽光の中に誇らかに繰



り広げていた。そして、空の色は、ソラ豆の葉っぱよりもっと濃い紺色をしていた。

今日も朝早くより荷物はまとめられ、天幕はたたまれて出発準備は完了しているのに、毎朝6時には出発していた早立ちポーター達もなかなか動き出しそうとはしなかった。ビーム・バードルとナイケと菊地君が何か言い合っているようだ。私はタシに、

「どの道を登って行くのかい。テの村を通して行くと都合なんだがね」

「あの一、この頭の上の大岩壁を越えて行くですよ」

「エッ。こんな垂直の大岩壁に道なんかついているのかい。信じられないね」、といいながら、私はカメラに二百ミリの望遠レンズをつけて眺めて見た。望遠レンズを通して見た岩壁は、肉眼で見るより余計に峙ば立って見え、ファインダーの中にも、ルートらしきものはなかった。

昨日チュクサンに引き上げて行った馬の待ち主が、馬に乗ってやって来た。栗毛色の馬だったが私には良い馬とは思えなかった。タシが、私がテストといって馬に乗り、一鞭当てて走り出した。そして戻って来て、

「バーバ。この馬はなかなか良い馬ですよ。特に

ギャロップが素晴らしい。私は気に入りました」というので、私は仕方なく二百五十ルピー支払うことにして契約した。それにしても、あの大岩壁をどうやってこの馬を引き上げるのだろうか。

そのうちにポーター達は動き出した。ここで解雇したポーターがいたので、荷物が8個程残ったようだ。この荷物は一両日中に、ここのパッティのゾプキョでタンゲ村まで運ぶことで落ち付いた。

勇敢なるポーター3人が一少くとも私にはそう見えた一大岩壁の下のカレ場に取りついている。遅々としてなかなか進まない。その中に後からもポーター達が続々と登り出した。既に先頭の3人は大岩壁の中段をトラヴァースし始めていた。落石の音が絶え間なく響いた。TBSスタッフも撮影をし始めている。ネパールの山道はよく信じられないようなところにつけられているのを、私はしばしば経験している。しかし、取りついて見ると、見た目とは違い意外と良い道だったりすることが多い。きっと、この道も取りついてしまえば、あのトラヴァース道は意外と広い棚になっているのかも知れない。

だが、私の馬はどうやってこの大岩壁を突破するのだろうか。

地域ニュース

《ネパール》

東京農大隊がローツェに登頂

サガルマータとの連続登頂を目指している東京農業大学隊（山下康成隊長（64）ら10名）は、5月10日、西面通常ルートからローツェ（8,516m）の登頂に成功した。登頂したのは、谷川太郎（35）、長久保浩司（34）、広瀬健太（33）、吉田裕一（32）、中村和貞（29）の5隊員。今春は天候不順で約1週間強風や降雪が続き、各隊のC2やC3のテントが吹き飛ばされたり破損する被害にあっている。同隊は引き続きサガルマータに挑戦する。

北大WVOB会隊がドルジェ・ラクパに登頂

ドルジェ・ラクパ（6,966m）の登頂を目指していた北海道大学WV部OB会隊（岡博文隊長（26）ら5名）は、3月19日、西稜通常ルートから岡隊長、富山久之隊員（24）と合同メンバーのゲルブ・シェルパ（32）の3名が登頂に成功した。日程は、下記のとおり。
2/28 BC（4,800m） 3/2 C1（5,400m） 3/6 C2（5,650m） 3/8 C3（6,050m） 3/15に6,760mまでルート工作。3/17と18の2回のアタックは失敗。

大阪鋭峰会がフングチ（7,036m）に初登頂

中国との国境にある同峰に派遣した登山隊（城隆嗣（66）隊長ら4名）は、4月19日、南西稜から清水寛治、森田正、福原らが初登頂に成功した。

明大隊がアンナプルナ I に南壁から登頂

アンナプルナ I（8,091m）に南壁イギリス・ルートから挑戦していた明治大学登山隊（山本篤（40）ら8名）は、5月16日に山本隊長、高橋和宏（29）登攀隊長、早川敦（29）、森章一（28）、加藤慶信（27）、天野和明（26）の4隊員とHAP2名が登頂に成功した。この結果、明治大学山岳部とOB会（炉辺会）による八千メートル峰14座登頂という記録を樹立した。

エヴェレストに同日50歳違いが登頂

ローツェと継続して最高峰に挑戦していた農大隊は、南東稜サウスコルから5月22日谷川が今シーズンネパール側第一号の登頂者となった。同日、長久保、吉田、山村武史（20）、広瀬の4隊員も登頂した。山村は20歳215日目で日本人の最高峰最年少記録を塗り替えた。また、広瀬が南北を通して日本人通算百登目の記録者となった。

一方、最高齢の世界記録更新を目指して入山していた三浦雄一郎チームも同日南東稜8,400mのキャンプから雄一郎（70）、三浦豪太（33）、村口徳行（46）が登頂した。雄一郎は70歳222日で世界記録更新と、日本人として初めての親子登頂記録となった。また、村口は加藤保男（1982年）、山田昇（1988年）に次ぐ最高峰3度目の登頂となった。

年少記録トップ5

1. 山村武史 2003, 5,22 南東稜 20歳-215日
2. 重川英介 1996, 5,11 北 稜 21歳-165日
3. 山田 淳 2002, 5,17 北 稜 23歳- 9日
4. 石川直樹 2001, 5,23 北 稜 23歳-327日
5. 佐藤光由 1985,10,30 南東稜 24歳-197日

高齢記録トップ5

1. 三浦雄一郎2003, 5,22 南東稜 70歳-222日
2. 石川富康 2002, 5,17 北 稜 65歳-176日
3. 山本俊雄 2000, 5,19 北 稜 63歳-279日
4. 渡邊玉枝 2002, 5,16 南東稜 63歳-176日
5. 今野一也 2000, 5,19 北 稜 61歳- 43日

トピックス

海外登山遭難対策研修会のお知らせ

日山協主催による恒例の上記研修会が下記要領で開催される。

記

1. 日時：6月28日～29日
2. 場所：国立赤城青年の家（群馬県勢多郡富士見村 ☎027-288-3131）

3. 会費：6千円（宿泊費含む）
4. 内容：エヴェレスト初登頂50周年にみる栄光と悲劇／21世紀のエヴェレスト登山を考える（パネルディスカッション）／群馬県人によるエヴェレスト登山
5. 申し込み先：日本山岳協会 ☎03-3481-2396

渡邊玉枝氏講演会他のご案内

登山に親しみ、登山を安全に楽しんでもらうために、神奈川県山岳連盟が主管して講演会・報告会が下記のとおり開催される・

記

1. 日時：7月20日（日）10時～16時半
2. 場所：神奈川県立かながわ女性センター
小田急線片瀬江ノ島駅下車徒歩15分
3. 内容：
 - 12:30～13:20 クラブ・イエティ
エヴェレスト（8,848m）登山報告
 - 13:30～15:00 渡邊玉枝氏講演
「山が好き、自然が好き」
 - 15:00～16:30 山の救急法、山のロープワーク、山の写真の撮り方
 - 10:00～16:30 山岳写真展
4. 参加費無料（500名）
5. 問い合わせ先：神奈川県山岳連盟事務局
水島彰治 ☎0467-72-3778

Books

JAPANESE ALPINE NEWS

日本山岳会が海外向け用として英文で編集した第3号。東カラコルム（JAC）、カキュ・カンリ初登頂（同志社大学）、テンギ・ラギ・タウ（北海道岳連）、シムシャール谷（横浜山岳会）、ギャチュン・カン（山野井）など新鮮味ある内容の報告が収録されている。HAJの提供による日本隊のヒマラヤ登山の集計も掲載されている。

同時に第4号として、EAST OF THE HIMALAYAS-To the Alps of Tibet-も発刊された。これは編集者の中村保氏が紹介し続けて

いるチベットの東部ニエンチェンタラ山群、カンリ・ガルボ山群、横断山脈を見事な写真を豊富に収録して報告されている。（記：山森）

3号 B5判 78頁（内カラー8頁）

価格 1500円（送料込み）

4号 B5判 114頁（内カラー40頁）

価格 2000円（送料込み）

[希望者はHAJ事務局に申し込んで下さい]

スポーツ文化

国立競技場の管理運営、スポーツ振興くじなどの事業を行っている「日本体育・学校健康センター」の事業の一つである「秩父宮記念スポーツ博物館」が刊行した創刊号。

スポーツを自然科学的な側面からばかりではなく、人文科学的な「文化」としてとらえて研究する必要から「スポーツ文化調査研究事業」が発足し、その要に「スポーツ文化調査研究協力者会議」が据えられ、その結果報告として纏められたもの。

主な内容は、①座談会「オリンピックに未来はあるか」（猪谷千春／小野清子／青島健太／塚田佐／井谷直樹／三ツ谷洋子）、②スポーツと自然の共生は可能か？、③フェアプレーとスポーツ文化を考える、④全国スポーツ関係博物館実態調査アンケートなど。巻末に昭和天皇が新築をされた秩父宮殿下に贈られた、朝倉文夫作（1928年）の「秩父宮殿下登山像」の写真が掲載されている。

A4判 62頁 2003年3月31日刊行

〒160-0013 新宿区霞ヶ丘町10 ☎03-3403-1159

日本体育・学校健康センター

秩父宮記念スポーツ博物館

東京集会のお知らせ

日時 6月30日（月）午後7時～

内容 今春のヒマラヤ登山

場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

西藏登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) チョモランマ (Qomolangma) 8, 848m & チャンツェ (Zhangzi) 7, 553m
1. チョモランマに立つ (日本山岳会隊・エベレスト中国ルート激闘全記録) 読売新聞社 昭和55年6月25日 1,000円
2. チョモランマ・チベット (日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告) 講談社 昭和56年11月10日 5,400円
3. 珠穆朗瑪登山1980 (北壁及び北東稜の登攀) 「山岳75年」日本山岳会 1980年12月1日 3,500円
4. みんなが頂上にいた (岡島成行) 山と溪谷社 1983年2月1日 1,900円
5. 雪煙をめざして (加藤保男) 中央公論社 昭和57年11月15日 1,200円
6. 果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
7. チョモランマ峰・美しい女神 (王富州) 「月刊人民中国」1982年6月号 200円
8. 珠穆朗瑪峰 (1979年チョモランマ偵察隊) 横山宏太郎「岳人393号」1980年3月号
9. 珠穆朗瑪峰登頂成功 (江本嘉伸) 「山と溪谷513号」1980年8月号
10. レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月
11. 絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂 (ラインホルト・メスナー) 「山と溪谷520号」1981年1月号
12. エベレストに秘められた (ラルフ・パーカー) 「山と溪谷522号&523号」1981年3&4月号
13. チベット北壁隊・苦闘の90日 (カモシカ同人) 「山と溪谷571号」1984年4月号
14. チョモランマ北壁への戦い上・下 (長谷川昌美) 「山と溪谷599&600号」1985年12月号&1986年1月号
15. 冬季・チョモランマ北壁 (Topics) 「山と溪谷598号」1985年12月号
16. チョモランマ単独行 (ラインホルト・メスナー) 山と溪谷社 1985年4月10日 2,200円
17. エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号
18. カモシカ同人隊、チョモランマ北壁撤退「山と溪谷602号」1986年3月号
19. 魔頂チョモランマ (今井通子) 朝日新聞社 1986年8月 1,300円
20. 東北東稜に挑んだダグ・スコット隊 (湊周介) 「岳人487号」1988年1月号
21. チベット友誼の華長存—1986年チャンツェ峰合同登山研修隊報告書— (第6次日中合同登山技術研修会) 1986年8月24日
22. チョモランマ北峰・章子峰登頂 (日本中国合同登山研修隊) 「岳人471号」1986年9月号
23. 端午の節句にエベレスト山頂で握手「岳人488号」1988年2月号
24. 冬のチョモランマの咆哮 (長谷川恒男) 「山と溪谷634号」1988年5月号
25. チョモランマ交差縦走に成功「岳人492号」1988年6月号
26. ドキュメント・チョモランマ、5月5日 (神長幹雄) 「山と溪谷637号」1988年8月号
27. 大量12人が山頂に立つ (岡島成行) 「岳人493号」1988年7月号
28. 中国・日本・ネパール三国合同チョモランマ交差縦走1&2 (中国登山協会) 「岳人496号&497号」1988年10月&11月号
29. 中・日・ネ三国友好登山隊 (大塚博美) 「山岳第83年」日本山岳会 1988年12月20日
30. チョモランマ峰西稜 (1987年秋) 川上隆「山岳第83年」日本山岳会 3,500円
31. 踏跡第7号 (防衛大学校山岳会珠穆朗瑪峰登山報告) 防衛大学山岳会 昭和63年9月
32. 第三の女神 (松本圭一) 1989年6月

33. チョモランマ見果てぬ夢 (長谷川恒男)「山と溪谷644号」1989年3月号
34. 珠穆朗瑪峰登山計画「ヒマラヤ213号」1989年8月号
35. チョモランマ北壁 (HAJ珠穆朗瑪峰登山隊)「ヒマラヤ218号」1990年1月号
36. チョモランマ峰カンジュンリッジ (平野真一)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月7日 3,500円
37. ふたりのチョモランマ (貫田宗男)「山岳第86年」日本山岳会 同前
38. チョモランマ・サガルマタ1988 (中国・日本・ネパール1988年チョモランマ・サガルマタ友好登山隊) 読売新聞社 1989, 5 5,150円
39. 禁じられた岩壁 エヴェレスト東壁新ルートの記録1988年「ヒマラヤ219号」1990年2月
40. チョモランマ／サガルマタ友好登山隊報告書 (日本山岳会) 1990／5
41. たったふたりのチョモランマ (貫田宗男)「山と溪谷674号」1991年9月号
42. 生と死のはざまに立ったたった2人のチョモランマ「岳人543号」1991年9月号
43. エベレスト最後の課題・未踏のカンジュン稜に挑む「世界最高峰の知られざる顔 (明治大学チョモランマ遠征隊)」「岳人545号」1991年11月号
44. 二人のチョモランマ (貫田宗男) 山と溪谷社 1992年2月 1,500円
45. 日本・カザフスタン友好チョモランマ登山報告 (同登山隊) 1993年2月20日
46. エヴェレスト北東稜 (もうひとつの報告)「岩と雪158号」1993年6月号
47. チョモランマ北東稜 (大宮求)「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月4日
48. エヴェレスト初登頂40周年「岩と雪158号」1993年6月号
49. もう一つのエヴェレスト、チョモランマトラバース「ヒマラヤ262号」1993年9月号
50. エベレストが二メートル低くなった話 (木崎甲子郎)「山601号」1995年6月号
51. 未踏の北東稜からエベレスト登頂!! (神崎忠男)「山602号」1995年7月号
52. 日本大学エベレスト登山隊、未踏の北東稜から初登頂「山と溪谷720号」1995年7月号
53. エベレスト北東稜を初完登「岳人577号」1995年7月号
54. 日本大学山岳部隊未踏の北東稜からエベレストに登頂「山と溪谷721号」1995年8月号
55. タクティクスの勝利 (古野淳) 同上
56. より強く、より高く (アリソン・J・ハーグリーブス)「山と溪谷722号」1995年9月号
57. 日本大学エベレスト登山ーピナクルを越えてー仮報告書 (同隊)
58. 日本大学エベレスト登山隊・1995北東稜登山報告書 (同隊) 1996年3月31日
59. 福岡珠穆朗瑪峰登山隊報告書 (同隊)
60. 珠穆朗瑪峰 (立正大学体育会山岳部)
61. 戸高夫妻のチョモランマ日誌 (戸高雅史・優美) 岳人609号 1998年3月号
62. 大地の女神チョモランマとの邂逅 (戸高雅史) 山と溪谷752号 1998年3月号
63. チョモランマ98年5月 昭和山岳会エベレスト登山隊、日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊の記録から「山と溪谷756号」1998年7月号
64. 世界の天辺の贅沢な思い (日本勤労者山岳連盟チョモランマ登山隊)「岳人614号」1998年8月号
65. エベレストより高い山へ (昭和山岳会エベレスト登山隊)「岳人614号」1998年8月号
66. 短期間に8人登頂の新記録 (チョモランマ登山報告①～③ 「登山時報283号～285号」1998年9月号～11月号
67. 検証 高所登山成功へのプロセス (上村博道／山本正嘉)「岳人618号」1998年12月号
68. エベレスト公募登山に参加して (小塚和彦)「ヒマラヤ335号」1999年10月号
69. 手記・チョモランマ登頂 (山本俊雄)「岳人638号」2000年8月号
70. チョモランマ・チャー・オユー登頂から生涯スポーツ・登山を考える (8000mに登った熟達者の知恵)「岳人638号」2000年8月号
71. 63歳、チョモランマの頂に立つ (山本俊雄)「山664号」日本山岳会 2000年9月20日

72. 63歳、チョモランマ最高齢登頂者の山本俊雄さんに聞く「山と溪谷781号」2000年8月号
73. 5世代で挑んだ最高峰 法政大学チョモランマ登山隊(中村敏夫)「山と溪谷781号」
74. 終でなく、これがはじまり(高橋留智亜さんインタビュー)「山と溪谷781号」
75. 至上の頂チョモランマ(東北地区海外登山研究会)2000年11月19日
76. チベット高原の秘められた花の谷カンシュンバレー(山下順子)「岳人647号」2001. 5
77. SUMMIT 北海道エベレスト登山隊2000登頂記録集(北海道山岳連盟)2001年5月13日
78. チョモランマ登頂記「地球の時間」を旅する(石川直樹)「山と溪谷793号」2001年8月号
79. 珠穆朗瑪峰1996(立正大学体育会山岳部)2001年12月
80. フォーラム「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」-70エベレスト・80チョモランマ・88三国交差縦走、そして現在-「山岳第96年」日本山岳会 2001年12月1日 3,500円
81. エベレストを南北から2度登頂した石川富康さん「岳人662号」2002年8月号
82. 札幌中央労山のチョモランマ 会の仲間で挑戦、登頂!(佐藤信二)「登山時報331号」2002年9月号
83. ノースコルへの道(斎藤豊+斎藤真理)「山と溪谷807号」2002年10月号
84. いまだ高くそびえる世界最高峰への挑戦(山田淳)「山690号」日本山岳会 2002年11月
- 2) マカルー(Makalu) 8,463m&チョモ・レンゾ(Chomo Lonzo) 7,790m
 1. 天空にのびる長大な岩稜を目指して(山本宗彦)「岳人572号」1995年2月号
 2. マカルー峰東稜より登頂成功!!(重廣恒夫)「山601号」1995年6月号
 3. マカルー東稜・登頂記(山本篤)「山602号」1995年7月号
 4. マカルー東稜に挑んだ日本山岳会隊、チベット側新ルートから登頂成功 同上 95. 8
 5. マカルー東稜初登に成功「岳人577号」1995年7月号
 6. マカルー東稜初登の軌跡(山本宗彦)「岳人578

- 号」1995年8月号
7. マカルー登頂の報を聞いて-若い隊員の飛躍を確信して-(山田二郎)「山603号」1995年8月
8. ヒマラヤに挑む-私の登山観-(藤平正夫)「山605号」1995年10月号
9. マカルー東稜(日本山岳会マカルー登山隊)1997年9月20日 山と溪谷社 4000円+税
10. 微笑んだ女神「チョモ・レンゾ」立教大学「山と溪谷703号」1994年2月号
11. 手作りの立大隊、新ルートからチョモ・レンゾ登頂(高橋克昌)「山と溪谷703号」1994年2月号
12. 烈風のチョモ・ロンゾ(武石浩明)「岩と雪164号」
13. チョモロンゾ峰 中国側からの初登頂 立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊の記録(鯉坂青青)「山岳第89年」1994年12月3日刊
14. 白き咆哮(立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊1993年報告書)「同隊」1994年10月刊
- 3) チョー・オユー(Cho oyu) 8,201m、チョー・ウィ(Qowoyat) 7,354m、ラブチェ・カン(Labuche Kang) 7,367m、スークァンリ(Sigugag Ri) 7,308m、メンルンツェ(Menlungtse) 7,175m
 1. 卓奥友峰登頂(張俊岩・成天亮)「ヒマラヤ177号」1986年8月号
 2. チョー・オユーの登頂と滑空(カモシカ同人)「岳人486号」1987年12月号
 3. 私は登り、あなたは飛んだ(カモシカ同人)「岳人486号」1987年12月号
 4. チョー・オユーから飛ぶ(高橋和之)「クライミング・ジャーナル 33号」1988年1月号
 5. チョー・オユー1985(三谷統一郎)「山岳第81年」日本山岳会 1986年12月20日
 6. チョー・オユーのパラグライダー・フライト(高橋和之)「山と溪谷629号」1987年12月号
 7. ヒマラヤを翔ぶ チョー・オユー-8,201m(高橋和之/今井通子)未来社 1,800円 1988
 8. 8,000m峰14座完登を目指す山田隊(日本ヒマラヤ協会チベット登山隊)「岳人500号」

9. 2つの8,000m峰連続登頂計画「ヒマラヤ204号」1988年11月号
10. 8千米峰連続登頂—シジャバンマ、チャー・オユー—「ヒマラヤ208号」1989年3月号
11. チャー・オユーとシジャバンマ（ヴォイチェフ・クルティカ「岩と雪145号」1991年4月
12. チャー・オユー峰登頂（芳賀孝郎）「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
13. 8,000mの女神の峰へ（永田秀樹）「岳人517号」1990年7月号
14. 幾つになっても登りたい シルバータートルのチャー・オユー（渡辺玉枝／遠藤京子）G「岳人535号」1992年1月号
15. 50歳以上のチャー・オユーの登頂（池田錦重）「山岳第87年」日本山岳会
16. 50歳の8,000m峰チャー・オユー無酸素挑戦記（近藤和美）「登山時報217号～218号」1993年3月～4月
17. チャー・オユー峰登頂1991（石川富康）「東海山岳No. 6」1994年2月
18. チャー・オユー峰～2つのビッククライミング（遠藤由加／山野井泰史）「岳人570号」1994年12月号
19. ふたりのチャー・オユー南西壁（長尾妙子＋遠藤由加）「山と溪谷713号」1994年12月号
20. チャー・オユー南西壁に単独で新ルート開拓 8,000メートル孤独の闘い（山野井泰史）「山と溪谷714号」1995年1月号
21. チャー・オユー アルパイン・スタイル（山野井泰史＋長尾妙子＋遠藤由加）「岩と雪168号」1995年2月号
22. チャー・オユー登山（深瀬一男）「山597号」1995年2月号
23. 運動生理学の成果と陥穽（日本チャー・オユー学術登山隊・山本正嘉）「山と溪谷721号」
24. 8千米メートル峰、登山タクティクス解明への試み（山本正嘉）「岳人578号」1995年8月号
25. 秋田から8千米峰へチャー・オユー峰（秋田チャー・オユー登山隊1995）1995年11月
26. チャー・オユー全員登頂（上）（下）（佐藤信二）「登山時報259号～260号」1996年9月号～10月号
27. 8,201mの頂きに8人全員立った（札幌中央勤労者山岳会）
28. チャー・オユー峰（8,201m）登頂報告（泉州山岳会葛城特別号）1997.7～10
29. 夢 時を越えて 1991年チャー・オユー峰（同人シルバータートル）2000年3月12日
30. それぞれのヒマラヤ、8000メートル（イエティ同人西暦2000年チャー・オユー登山隊）「山と溪谷782号」2000年9月号
31. この秋、日本人登山隊が多数登頂した世界第6位の高峰、チャー・オユー「山と溪谷797号」2001年12月号
32. 学生ふたりで8000m峰へ チャー・オユー、シェルパレス・無酸素登頂の記録（大石盟弘）「山と溪谷798号」2002年1月号
33. チャー・オユーへ 初の日中女子合同登山隊「山686号」日本山岳会 2002年7月20日
34. チャー・オユー登頂記 エベレスト。人生の高く遠い旅のはじまり（三浦雄一郎）「山と溪谷805号」2002年8月号
35. 日・中チャー・オユー女子合同登山隊2002（橋本しをり）「山690号」日本山岳会2002年11月20日
36. チャー・オユー女子登山隊員とトレーニング（恩田真砂美）「山691号」日本山岳会2002年12月20日
37. チャー・オユーで微笑んだ5人のチベット女性登山家たち（柏澄子）「岳人669号」2003年3月号
38. 速報2002年秋、ヒマラヤ・ジャイアンツチャー・オユー、シジャバンマ、ギャチュン・カン「山と溪谷809号」2002年12月号
39. 多様化する思考と登山『チャー・オユー アドベンチャーガイド隊』『ギャチュン・カン 山野井泰史・妙子』『シジャバンマ東京農大 隊』『チョモランマ マルコ・シフレディ』「岳人669号」2003年3月号
40. 拉普契干峰偵察報告「ヒマラヤ181号」1986年12月号
41. 日中友好ラブチェ・カン峰合同登山計画「ヒマラヤ190号」1987年9月号
42. ラブチェ・カン初登頂「ヒマラヤ194号」1988

年1月号

43. 15人のサミッター (山森欣一)「山と溪谷630号」1988年1月号
44. ラプチェ・カン初登頂「岳人488号」1988年2月号
45. 友好の白き頂ラプチェ・カン (日本ヒマラヤ協会) 1988年4月
46. ラプチェ・カンⅡ (7,072m) 初登頂—1995年スイス隊の記録—「ヒマラヤ294号」1996年5月号
47. 喬烏衣登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
48. 喬烏衣登山報告「ヒマラヤ182号」1987年1月号
49. 端正な未踏峰チョー・ウィ登頂 (日本ヒマラヤ協会隊)「岳人476号」1987年2月号
50. 喬烏衣登山報告書 (日本ヒマラヤ協会チョー・アウイ登山隊1986年実行委員会) 1986年11月15日
51. 喬烏衣峰7,354m (日本ヒマラヤ協会、チョー・アウイ登山実行委員会) 1987年7月
52. 四光峰の風—チベットの白き頂きに立つ— (大阪市立大学日中友好学術登山隊) 1990年7月
53. 秘峰 [メンルンツェ] 初登頂 (アンドレイ・シュトレムフェリ)「岩と雪157号」1993年4月号
- 4) シシャバンマ (Xixabangma) 8,027m & ポーロン・リ (Porong Ri) 7,292m、カンペンチン (Kanpenqin) 7,281m、リスム (Risum) 7,050m
1. シシャバンマ1981年・春 (日本女子登山隊の記録) 女子登攀クラブ 1981年9月 2,200円
2. 女たちの山 (シシャバンマに挑んだ9人の決算) 落合誓子 山と溪谷社 昭和57年12月10日 980円
3. シシャバンマ峰・氷美の世界 (張俊岩)「月刊人民中国」1983年1月号
4. 女だけのシシャバンマ (北村節子)「山と溪谷521号」1981年2月号
5. 手記・私ひとりのシシャバンマ (田部井淳子)「山と溪谷531号」1981年8月号
6. 麗峰シシャバンマに立つ (北村節子)「山と溪谷531号」1981年8月号
7. 改造人間シシャバンマと戦う (悪天に阻まれた速攻登山) 原真「岳人427号」1983年1月号
8. ドキュメント「速攻登山」(加藤幹敏・原真)「東京新聞出版局」1984年3月 2,200円
9. 現代ヒマラヤ登攀史 (編集部)「岩と雪111号」昭和60年8月号
10. チョー・オユーとシシャバンマ (ヴォイチェフ・クルティカ)「岩と雪145号」同前
11. 60歳の8千メートル峰登頂記 (中島道郎)「山544号」1990.11.20
12. 毎日新聞、8千メートル峰「無酸素」登頂の報道記事に思う (中島道郎)「山545号」1990年11月号
13. 還暦男二人、八千米峰に登るの記 (中島道郎)「山岳第85年」日本山岳会 1990年12月 3,500円
14. 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊 (シシャバンマ隊) 報告 (松沢哲郎)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
15. 遠き嶺シシャバンマ (長野県山岳協会創立30周年記念登山隊) 1992年9月
16. 福岡支部創立35周年シシャバンマ隊報告 (日野悦郎)「山岳87年」日本山岳会 1992年12月5日
17. 希夏邦馬峰 立正大学山岳部 1993年3月
18. 50歳の8,000m峰シシャバンマ無酸素挑戦記 (近藤和美)「登山時報219号」1993年5月号
19. シシャバンマ登頂1989 (湯浅道男)「東海山岳No. 6」1994年2月1日
20. 女たちの地球山旅 秘境シシャバンマへの凱旋 (北村節子)「岳人556号」1993年10月号
21. イェジ・ククチカ残されたシシャバンマに西稜から登頂 (坂下直枝)「山と溪谷629号」1987
22. XIXABANGMA 1980年プレ・モンスーン西ドイツ隊の記録「岩と雪83号」1981年8月
23. 遥かなるチベット 希夏邦馬峰登頂 (愛知学院大学山岳会) 1990年2月
24. 雪豹同人シシャバンマ登山報告 (日本勤労者

山岳連盟)

25. シンジャパンマ登頂レポート 1～5 (労山・雪豹同人希夏邦瑪峰登山隊「登山時報239号～243号」1995年1月号～5月号)
26. 再起の山 シンジャパンマ (小西政雄×松田宏也)「山と溪谷725号」1995年12月号
27. 安堵、そして充実のとき (松田宏也)「岳人582号」1995年12月号
28. シンジャパンマ 1995年秋シンジャパンマ峰登山報告書 (Y. M. S タートル倶楽部) 1996年2月刊
29. Der Bergmorgen 3号 (故 和田実君追悼号 Porong Ri 報告) 大分 R. C. C 昭和58年5月17日
30. ポーロン・リ登頂 (梅木秀徳「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円)
31. 北京大学隊、ポーロン・リ (7,292m) で雪崩遭難「ヒマラヤ371号」2002年10月号
32. チベット高原学術登山隊1982概要報告書 京都大学学士山岳会
33. カンペンチン (森本陸世)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
34. チベット旅情 (カンペンチン初登頂) 齊藤清明 芙蓉書房 昭和58年7月15日 1,500円
35. チベットをゆく 京都大学学士山岳会 (カンペンチン登頂と学術調査82. 3～5) レポーター 永田秀樹「岳人421号」1982年7月号
36. Kangpencqin (7281m)
Kangphu Ri (7230m)
愛媛大学カンペンチン登山隊報告書 1998
愛媛大学山岳会 2000年7月
37. 未踏峰「発見・消失・再発見」の顛末〈リズム登山学校〉 (近藤和美)「登山時報266号」1997年4月号
38. リズム峰初登頂報告 (上) (下) (近藤和美)「登山時報270号～271号」1997年9月号～10月号
39. ささやかな初登頂リズム峰 (近藤和美)「岳人602号」1997年8月号
40. 芒拉 STEI'96報告書 (滋賀県高等学校体育連盟登山部) 1997年3月31日
- 5) ナムチャ・バルワ (Namcha Barwa) 7,782m
& ギャラ・ペリ (Gyala Peri) 7,294m
 1. ナムチャバルワ (水野勉)「ヒマラヤ128号」1982年7月号
 2. ナムチャバルワ峰登頂を目指して (李舒平)「岳人451号」1985年1月号
 3. ナムチャバルワ (伊東享)「山と溪谷597号」1985年11月号
 4. 最高峰ナムチャバルワとヤル・ツァンポー大屈曲点周辺の山々 (山森欣一)「岳人464号」1986年2月号
 5. 東チベットの大湾曲部と幻の高峰 (山森欣一)「山と溪谷601号」1986年2月号
 6. ギャラ・ペリとナムチャバルワ (伊東享)「岳人464号」1986年2月号
 7. チベットの秘峰・南迦巴瓦峰 (王振華)「ヒマラヤ184号」1987年3月号
 8. ヤルツァンポー河大湾曲部調査 (楊逸疇、丘睦美訳)「ヒマラヤ94号」1979年9月号
 9. ナムチャ・バルワへの道 1～3「ヒマラヤ224号～226号」1990年7月～9月号
 10. 神秘のグレート・ベンド ナムチャ・バルワ 日本ヒマラヤ協会 1991年1月1日
 11. ナムチャバルワ峰偵察隊第1～2報 (重廣恒夫)「山547&548」1991. 1～2
 12. NAMCHA BARWA 鷹が両翼を広げたようにそそり立つ未踏の秘峰「岳人525号」
 13. 「ナムチャバルワ」いかにして登るか (和田城志)「岩と雪147号」1991年8月
 14. 幻の山 ナムチャバルワを飛ぶ (迫田泰敏)「山と溪谷675号」但し写真は裏焼き!
 15. ナムチャバルワ峰偵察報告 (重廣恒夫)「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 16. ナムチャバルワ通信 (重廣恒夫)「山557～560号」1991. 10～92. 1
 17. 大鷹を思ふチベットの秘峰、ナムチャバルワへの挑戦 (日中合同登山隊)「岳人537号」1992年3月号
 18. 1991年ナムチャバルワ峰合同登山 (重廣恒夫)「山岳第87年」日本山岳会
 19. ナムチャバルワの気象 (奥山巖)「山岳第87年」1992年12月5日

20. チベットの秘峰ナムチャバルワ初登頂(日中ナムチャバルワ合同登山隊)「岳人548号」1993年2月号
21. 日本・中国ナムチャバルワ合同登山「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月
22. ナムチャバルワ第六信〜八信(重廣恒夫)「山569〜571号」1992年10月号〜12月号
23. ナムチャバルワ初登頂 読売新聞社 1994年10月30日刊 非売品
24. 7,000mの未踏峰をめざして(ギャラ・ペリ偵察)「岳人463号」1986年1月号
25. 秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
26. 謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」(日本ヒマラヤ協会隊)「山と溪谷618号」1987年2月号
27. 加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
28. 謎の河の白い頂(HAJギャラ・ペリ登山隊)「ヒマラヤ183号」1987年2月号
29. 謎の河の秘峰ギャラ・ペリ 日本ヒマラヤ協会 昭和62年9月1日
30. まだ誰も登ったことがない山サンルン7,095(中村進)「山672号」日本山岳会 2000年5月20日
31. 一年越しのサンルン峰へ(中村進)「山683号」日本山岳会 2002年4月20日
- 6) ナムナニ(Namunani) 7,694m&カン・リンポチェ(Kang Rimpoche) 6,656m
 1. 納木那尼峰(日中友好納木那尼合同登山隊)「岳人447号」1984年9月号
 2. 西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号
 3. 風雪は人を磨く(李舒平)「岳人464号」1986年2月号
 4. 日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書 日中友好納木那尼峰合同登山隊
 5. ナムナニ(日中友好納木那尼峰合同登山隊)毎日新聞社 1986年6月 6,900円
 6. 聖地巡礼とナムナニ峰偵察・1984年「年報・HIMALAYA 3月号」日本ヒマラヤ協会 1986年9月15日
7. ナムナニ峰登頂(日本山岳会・福岡支部)1998年8月21日
8. ナムナニ峰登頂と辺境の旅(浦一美)「山643号」1998年12月20日号
9. チベット2座連続カバン(6,717m)&ナムナニ(7,694m)登頂計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号
10. チベット連続登頂登山隊報告(中)ー孤高の山にアルパイン・スタイルで挑む(HAJ登山隊)「ヒマラヤ340号」2000年3月号
11. 夢の途中で 日本ヒマラヤ協会チベット連続登頂隊の記録から(山森欣一)「山と溪谷775号」2000年2月号
12. コーチとふたりで登ったチベットの7000m峰ナムナニ登頂(山田晋)「山と溪谷802号」2002年5月号
13. ナムナニ峰 2001年秋関西大学体育会山岳部 2002年6月
14. 聖山巡礼(玉村和彦)山と溪谷社 1987年5月 1,800円
15. 未踏の山・辺境の山第5回「カイラス」(加藤洋)「岳人409号」1981年7月号
16. 聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
17. チャンタン高原から聖地巡礼の旅(山森欣一)「ヒマラヤ156号」1984年11月号
18. 西藏・聖地カイラス巡礼(NHK取材班)日本放送出版協会 昭和60年6月1日 1,700円
19. チャンタン高原と聖地巡礼(山森欣一)「岳人450号」1984年12月号
20. 神の山 カイラス(五百沢智也)「山と溪谷583号」1985年1月号
21. 聖なる山「カイラス」へ(貫田宗男)「山と溪谷624号」1987年7月号
22. チベットの霊山 カイラス(足立隆)「岳人504号」1989年6月号
23. 聖山「カン・リンポチェ」日本巡礼団の旅(桶川和気夫)「ヒマラヤ275号」1994年10月号
24. グゲ王国とカイラス山、西ネパールの旅(永田秀樹)「岳人575号」1995年5月号
25. 聖地カイラスで感じた新たな山の世界(戸高

雅史)「岳人634号」2000年4月号

26. チベット連続登頂登山隊報告(下)ー連続登山を終えて聖山巡礼へー「ヒマラヤ341号」2000年4月号

7) ガンカル・プンスム (7, 570m)

1. 崗嘎普松峰偵察(伊丹紹泰)「山645号」1999年2月号
2. ガンカー・プンスム峰登山隊計画延期の経緯について(大森薫雄)「山647号」1999年4月号
3. 南側からの視点ーブータン・ヒマラヤ、中国・ブータン国境についてー(吉永英明)「同上」
4. 中国・チベットに聳える 未踏の世界最高峰ガンカー・プンスム峰(中村進) 岳人620号 1999年2月
5. 北面から探ったガンカー・プンスム峰(中村進)「岳人621号」1999年2月号
6. ガンカープンスム峰周辺のブータン政府発行の地図の考察(斎藤惇生)「山649号」日本山岳会1999年6月20日
7. 世界第二の未踏峰リャンカンカンリに登頂(中村進/小林尚礼) 山と溪谷769号 1999年8月号
8. リャンカンカンリ初登頂(角谷道弘/小林尚礼) 岳人626号 99年8月号
9. ガンカー峰とリャンカンカンリ峰を考える(山森欣一)「ヒマラヤ332号」1999年7月号
10. ブータン国境北面の山々を見る(山森欣一)「ヒマラヤ357号」2001年8月号

8) クーラ・カンリ (Kula Kangri) 7, 538m、カルジャン (Karjiang) 7, 221m&ターラ・リ (T hala Ri) 6,777m

1. 天帝の峰クーラ・カンリを目指して「長谷川浩」「岳人464号」1986年2月号
2. 微笑んだ「天帝の峰」クーラ・カンリ「山と溪谷610号」1986年8月号
3. クーラ・カンリ初登頂ーそして東チベットから成都へ初横断ー(神戸大学西藏学術登山隊)「岳人472号」1986年10月号
4. クーラ・カンリ初登頂(平井一正)「山岳第82年」日本山岳会 1987年12月20日 3,500円
5. 天帝の峰に挑む(神戸大学西藏学術登山隊)

神戸新聞総合出版センター 1988年8月

3,500円

6. クーラ・カンリⅡ登山計画「ヒマラヤ304号」1997年3月号
7. クーラ・カンリⅡ(7,418m)北面報告「ヒマラヤ310号」1997年9月号
8. 「天帝の峰」クーラ・カンリ中央峰・東峰登頂(出利葉義次)「山と溪谷794号」2001年9月号
9. 遥かなるチベット クーラカンリ 中央峰(7,418m)・東峰(7,381m)初登頂の記録(東海大学・チベット大学クーラカンリ友好学術登山隊2001) 2002年3月1日
10. クーラ・カンリ主峰(7,538m)に新ルートを求めて(HAJクーラ・カンリ登山隊)「ヒマラヤ357号」2001年8月号
11. 南チベット、未知の山と名峰に挑む(山森欣一)「山と溪谷786号」2001年1月号
12. 神領の峰へ(HAJカルジャン登山隊)「ヒマラヤ179号」1986年10月号
13. 烈風の頂へーカ熱彊峰初登頂の記録ー「ヒマラヤ182号」1987年1月号
14. ブータン国境への旅クーラ・カンリ南面を見る(山森欣一)「ヒマラヤ309号」1997年8月号
15. 南チベット未知の山群ターラ・リ(6,777m)に挑む(HAJターラ・リ登山隊)「ヒマラヤ350号」2001年1月号

9) ヤンラ・カンリ (Yangra Kangri) 7, 429m&カバン (Kabang) 6,717m

1. ガネッシュ・ヒマール北面(山森欣一)「山と溪谷739号」1997年2月号
2. ヤンラ・カンリ偵察記(山森欣一)「ヒマラヤ306号」1997年5月号
3. 未踏の頂に憧れて カバン(6,717m)偵察計画「ヒマラヤ324号」1998年11月号
4. 未踏の頂 カバン(6,717m)偵察報告「ヒマラヤ326号」1999年1月号
5. 未踏の峰に憧れて(山森欣一)「山と溪谷763号」1999年2月号
6. ヤンラ・カンリ(7,429m)登山計画(HAJ)「ヒマラヤ357号」2001年8月号

7. チベット連続登頂登山隊報告(上)ーカバン峰登山報告ー(HAJ登山隊)「ヒマラヤ339号」2000年2月号
8. ヤンラ・カンリ北面に挑む[ガネッシュ・ヒマール主峰](HAJ登山隊)「ヒマラヤ363号」2002年2月号
- 10) **チョモラーリ (Qomo Lhari) 7,364m**
 1. 綽莫拉利峰ーチョモラーリ(張俊岩/福山佑訳)「ヒマラヤ184号」・1987年3月号
 2. 曠野に座する仙女の峰「チョモラーリ」(東野良)「山と溪谷725号」1995年12月号
 3. 女神の山 チョモラーリ(長野県山岳協会)1996年11月25日
- 11) **ニンチン・カンサ (Ningchin Kangsha) 7,206m & チョム・カンリ (Qumg Kangri) 7,048m**
 1. 第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書ニンチンカンサ登山隊・東チベット踏査隊 1985大分県山岳連盟(松元徹編)大分県山岳連盟1986年12月 1,800円
 2. 宇金抗沙峰(ニンチンカンサ)西面初登頂 仮報告書(栃木県高校体育連盟登山部)1995.9
 3. 寧金抗沙峰合同登山隊1995年報告書(福岡大学体育会山岳部/福岡大学山岳会)
 4. 輝ける白き峰 ニンチンカンサ西稜初登頂の記録(栃木県高体連登山部)1996年3月30日
 5. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画(ヒマラヤ308号)1997年7月号
 6. ニンチン・カンサ峰登頂「ヒマラヤ314号」1998年1月号
 7. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画「ヒマラヤ319号」1998年6月号
 8. ニンチン・カンサ(7,206m)西稜初登攀報告「ヒマラヤ325号」1998年12月号
 9. 寧金抗沙峰(日本ヒマラヤ協会)1999年6月20日
 10. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画(HAJ隊)「ヒマラヤ356号」2001年6月号
 11. ニンチン・カンサ(7,206m)西稜第2登ー今世紀初のHAJ隊登頂成功ー「ヒマラヤ362号」2002年1月号
 12. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画(HAJ隊)「ヒマラヤ369号」2002年8月号
13. ニンチン・カンサ(7,206m)登山報告(HAJ隊)「ヒマラヤ372号」2002年11月号
14. 中央大学チョムカンリ登山隊1997 仮報告書(同大学山岳部)1997年6月5日
15. チョム・カンリ(7,048m)登山計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号
16. チョム・カンリ(7,048m)登山計画(HAJ隊)「ヒマラヤ333号」1999年8月号
17. チョム・カンリ南壁第3登報告ー女神の山は微笑まず、連日悪天の苦しい登攀(HAJサマー・キャンプ登山隊)「ヒマラヤ337号」1999年12月号
18. 女神の峰、チョム・カンリ南壁登攀記(関根孝次)「山と溪谷774号」2000年1月号
19. 中国・韓国合同登山隊のこと(山野1997年春号・趙牧)「ヒマラヤ347号」2000年10月号
- 12) **ニエンチェンタンラ (Nyainqentanglha) 7,162m**
 1. 東北大学日中友好西藏学術登山隊報告書(東北大学日中友好西藏学術登山隊実行委員会)1986年9月
 2. チベット高原の盟主ーニエンチェンタングラー東北大学山の会 1994年6月刊
 3. 未登峰ニエンチェンタングラIV峰に登頂成功(藤田清)「登山時報250号」1995年12月号
 4. ぼくたちのヒマラヤ登山 ハイキングから未踏の7,000m峰ニエンチェンタングラへ(松葉桂二)「岳人582号」1995年12月
 5. 桑頂抗沙峰登山隊報告(同隊)1994年3月15日
 6. タンラ・ボ(6,394メートル)登頂(中央大学学友会体育連盟山岳部)「岳人576号」1995年6月
 7. 現役大学生主体で登ったチベットの未踏峰タンラ・ボ(黒川恵)「山と溪谷720号」1995年7月号
 8. タンラ・ボ峰初登頂報告書(中央大学山岳部)1995年6月22日
 9. 未踏の白き頂を目指して(中津川勤労者山岳会)1996年11月20日
 10. OHTE'95登山報告書(1995年大阪府高校生日

中友好登山隊) 1996年7月25日

11. 念青唐古拉山脈の無名峰を目指して(興田勝幸)「登山月報355号」平成10年10月号
12. チベット無名峰へ(日本教員登山隊)
- 13) **ルンボ・カンリ (Loinbo Kangri) 7,095m & カキュ・カンリ (Kaqr Kangri) 6,859m**
 1. チベットの未踏峰、ルンボ・カンリ登山計画「ヒマラヤ270号」
 2. ルンボの神を仰ぎて(八嶋寛)「ヒマラヤ274号」
 3. ルンボ・カンリ試登7,095メートル(日本ヒマラヤ協会ルンボ・カンリ登山隊)「山と溪谷709号」1994年8月号
 4. ルンボ・カンリーチベットの未踏峰・7,095m。1994年試登の記録ー(日本ヒマラヤ協会) 95.4
 5. ロンライカンリ峰初登頂を目指して(和田豊司)「山683号」日本山岳会 2002年4月20日
 6. チベット・ヤルツァンポ源流の未踏峰ロンライ・カンリ(6,859m)初登頂(和田豊司)「岳人667号」2003年1月号

14) カント (Kangto) 7,060m

1. カント峰に賭けた同志社大学の山男「岳人493号」1988年7月号
2. 遥か久恋の峰(同志社大学カント峰登山隊)毎日新聞社 1989年7月20日 6,180円

15) カンリ・ガルボ山群

1. 崗日嘎布山群から察隅地方へ(中村保)「ヒマラヤ296号」1996年7月号
2. ヒマラヤの東(中村保)1996年3月15日 山と溪谷社 3,000円
3. 横断山脈の未踏の山々(中村保)「岳人597号」1997年3月号
4. 東南チベットの空白部カンリガルボ(崗日嘎布)山群を探る(上、中、下)中村保「岳人627号~629号」1999年9月号~11月号
5. 東南チベット間 崗日嘎布の現代氷河(中村保訳)「ヒマラヤ335号」1999年10月号
6. 東南チベットの空白部ー崗日嘎布山群を探る(中村保)「山岳第94年」日本山岳会 1999年12月4日 3,500円
7. 東南チベットの未踏の山群ーダムヨンからカ

ンリガルボへー(中村保)「岳人627号」

8. ヒマラヤの東の空白部 崗日嘎布山群(中村保)「山と溪谷772号」1999年11月号
9. 若尼峰(ルオニ6,610m)登山計画「ヒマラヤ345号」2000年8月号
10. 深い浸食の国 ヒマラヤの東 地図の空白部を行く(中村保)山と溪谷社 2000年11月10日 3,000円+税
11. 南東チベットの秘境カンリガルボ山群探査(杉山敬弘)「岳人657号」2002年3月号

16) ニェンチェンタラ東部

1. チャチャチョ偵察6,447メートル(長野県山岳協会西藏東部登山隊)「山と溪谷709号」1994年8月号
2. チベットのアルプスへ 未踏の念青唐古拉山脈東部を探る(中村保)「山と溪谷800号」2002年3月号
3. 未踏の念青唐古拉山脈東部を探る1~2(中村保)「ヒマラヤ365号~366号」2002年4月号~5月号
4. チベットのアルプスへPart II 念青唐古拉山脈東部。未踏の中央山塊を探る(中村保)「山と溪谷808号」2002年11月号
5. チベットのアルプスへー東チベット4000キロ(中村保)[補設]チベットの天葬(鳥葬)(訳・構成:川瀬史郎)「山岳第97年」日本山岳会 2002年12月7日 3,500円
6. チベットのアルプスへ 東チベット4,000キロ(1~4)「岳人664号~667号」2002年10月号~2003年1月号
7. 念青唐古拉山脈東部の最深部を行く1~2(中村保)「ヒマラヤ374号~375号」2003年1月号~2月号

(その他)

1. 中国の山へのアプローチ(阿部淳)「ヒマラヤ104号」1980年6月号
2. 中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」1980年6月
3. 開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号
4. 中国の高峰 中国登山協会監修 東京新聞出版局 昭和56年1月29日 2,000円

5. チベットの旅 (中国人民美術出版社編) 美乃美 1981年5月20日 1,500円
6. 中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号
7. 中国登山ハンドブック (未知、秘境、未踏の山総ガイド) 上越山岳協会 ベースボールマガジン社 1981年12月20日 1,800円
8. 進む中国奥地の山岳研究 (渡辺義一郎)「岳人415号」1982年1月号
9. チベット南東部の氷河 (鄭本興)「岩と雪80号」1982年4月号
10. チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1997年 (貞兼稜子編) 亜細亜大学アジア研究所 昭和57年4月10日 6,500円
11. 世界のアルピニストがねらう中国の山々 (王鳳桐)「月刊人民中国」1982年5月号
12. 写真集 チベット (ユーゴスラヴィア・レビュー社／中国上海美術出版社) ベースボール・マガジン社 1982年 9,800円
13. チベット (篠山紀信) 朝日新聞社 1982年 6,000円
14. 入蔵日誌 (矢島保治郎) チベット文化研究所 1983年1月22日 1,800円
15. 東チベット紀行 (ドウオグ村の人とその暮らし) 江本嘉伸「山と溪谷560号」1983年7月号
16. これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号
17. 中国登山研究「ヒマラヤ142号」1983年9月号
18. 中国登山協会一行来日「岩と雪98号」83年10月
19. チベットおよびその付近の山々 (フランク・ブースマン／水野勉・訳)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
20. ヒマラヤ文献目録 (薬師義美編) 白水社 1984年1月25日 19,000円
21. ルンタの秘境 (江本嘉伸) 光文社 1984年4月30日 980円
22. チベット滞在記 (多田等観・牧野文子編) 白水社 1984年 1,800円
23. 氷山雪嶺 二千年 (周正) 譚佐強／田川常雄・訳 ベースボールマガジン社 1985年3月10日 2,200円
24. 中国西域紀行 (風見武秀)「岳人460号」1985年10月号
25. 初のヒマラヤ横断1,000km (山里寿男)「岳人461号」1985年11月号
26. ラサへのあこがれ (D. レイフィールド、水野勉訳) 日本山書の会 1985年11月 4,500円
27. 天上の道—憧憬のラサヘ (トーマス・レイヤード)「山と溪谷597号」1985年11月号
28. チベットおよびその付近の山々補遺 (水野勉)「山岳第80年」日本山岳会 1985年12月20日 3,500円
29. ヒマラヤ文献逍遙 (水野勉) 鹿鳴荘 1986年3月 18,000円
30. 中国登山研究会 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ174号」1986年5月号
31. 中国登山の和文参考資料一覧 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ175号」1986年6月号
32. 世界無銭旅行者・矢島保治郎 (浅田晃彦) 筑摩書房 1986年6月 1,600円
33. 東チベット紀行 (E・タイクマン、水野勉訳) 白水社 1986年7月5日 2,200円
34. 躍進するチベット登山協会 (山森欣一)「ヒマラヤ176号」1986年7月号
35. 女性大使チベットを行く (劉曼卿著／岡崎俊夫・松枝茂夫共訳) 白水社 1986年8月30日 2,200円
36. 憧憬の中国、西遊の7,000km「山と溪谷611号」1986年9月号
37. 中国登山研究会「ヒマラヤ184号」1987年3月号 500円
38. 中国の費用撤収規定 (1987年1月発効)「ヒマラヤ186号」1987年5月号
39. チベット自転車行 (九里徳泰)「ヒマラヤ190号」1987年9月号
40. 中国大陸・下巻 天壤無限 (白川義員) 小学館 28,000円
41. チベットのお正月 (藤田弘基)「岳人487号」1988年1月号
42. チベット走破5,000キロ (九里徳泰)「山と溪

- 谷631号」1988年2月号
43. 東ヒマラヤ探検の歴史(上) 東チベットとビルマ北部の山々(金子民雄)「岳人488号」1988年2月号
 44. 東ヒマラヤ探検の歴史(中) ベイリー、ウォードらの探検(金子民雄)「岳人489号」1988年3月号
 45. 厳寒の友好道路走破(小林憲生)「山と溪谷632号」1988年3月号
 46. エベレスト、マカルーを飛ぶ(岡島成行)「山と溪谷633号」1988年4月号
 47. チベットのファッション(藤田弘基)「岳人490号」1988年4月号
 48. 東チベット横断紀行(朝日教之) 山と溪谷社 1988年10月 1,600円
 49. TIBET 失われた魂・チベット(遠藤正雄) 時事通信社 1989年5月 2,370円
 50. ーラサに厳戒令敷かれるー(江本嘉伸)「山と溪谷646号」1989年5月号
 51. チベット高原自転車ひとり旅(九里徳泰) 山と溪谷社 1989年11月 1,600円
 52. 中国登山の手引き・初版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1990年3月31日 3,000円
 53. 長寿と叡智をもたらす聖なる山の偉大な河「ヤル・ツァンポー」(ギャロル・ダナム)「山と溪谷666号」1991年1月号
 54. 西藏漂泊 チベットに魅せられた10人の日本人(江本嘉伸)「山と溪谷666号」1991年2月号
 55. 世界の屋根を逍遥 夢のチベット・トレッキング(クリスティナ・フォン・ディットフルト)「山と溪谷678号」1992年2月
 56. 中国登山の手引き・第二版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1992年4月22日 3,000円
 57. チョモランマ・カンジュン谷周辺の地形(明治大学チョモランマ峰遠征隊・学術班) 93年11月
 58. 西藏漂泊(江本嘉伸) 山と溪谷社(上)2,800円(下)3,000円
 59. エヴェレスト 1921年、1922年(ジョージ・リー・マロリー／田中純夫訳) 日本山岳会上越支部 1994年8月刊
 60. 中国登山の手引き・第三版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1994年3月18日 3,500円
 61. チベット紀行(帝塚山学院チベット踏面隊)「岳人571号」1995年1月号
 62. 世界の山々(アジア・アフリカ・オセアニア編) 古今書院 1995年9月2日 2,800円
 63. 青いケシの国からチベットへ(盛田武士)「岳人586号」1996年4月号
 64. 中国の手引き・第四版(山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1996年5月15日 3,500円
 65. チベット高原走破の旅(竹内哲夫)「山619号」1996年12月号
 66. 中国登山20年(山森欣一)「ヒマラヤ328号」1999年3月号
 67. メコン、サルウィン分水峰の山と谷(中村保)「山と溪谷765号」1999年4月号
 68. 伝説の登山家G・マロリー(江本嘉伸)「岳人625号」1999年7月号
 69. 雲南・西藏横断4,000km(鎌澤久也)「山と溪谷742号」1997年5月号
 70. 西藏登山の和文参考資料一覧(1979年開放以後のもの)「ヒマラヤ334号」1999年9月号
 71. 崑崙・北西藏縦断探査踏査メモ(阿部淳)「ヒマラヤ348号」2000年11月号
 72. チベット旅行事情ー2000年夏の旅からー(沖允人)「ヒマラヤ351号」2001年2月号
 73. チベット潜行1939(野元甚蔵) 悠々社 2001年8月15日 3,300円
 74. 青海・チベット鉄道着工「ヒマラヤ361号」2001年12月号
 75. チベットの都・ラサ案内(金子英一) 平河出版社 1982年6月20日 2,700円
 76. チベット紀行(NHK取材班) 日本放送出版協会 1982年 1,500円
 77. チベット潜行十年 中公文書(木村肥佐生) 中央公論社 1982年 400円
 78. チベットわが祖国ーダライ・ラマ自叙伝ー(木村肥佐生訳) 亜細亜大学アジア研究所 1986年1月15日 1,800円
 79. 中国とたたかったチベット人(J・ノルブ編著、ベマ・ギャルポ／三浦順子共訳) 日中出版 1987年1月25日 1,800円

H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録 (H A J 創立35周年記念誌)	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 秀麗ヌン峰を攀じる (1991年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ (1984年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトパント1990年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” プラマブトラの激流を下る (1990～1991年)	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンボ・カンリ (1994年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)

■ 寸 感 ■

中国肺炎 (SARS) でチベットが入域全面禁止措置をとったためHAJのサマーキャンプ隊も対応に苦慮している。隊員には一応パキスタン転進で了解を得ているが、この号がお手元に届く頃には結論が出ていることでしょう。

2003年5月22日、世界最高峰に日本人が50歳達いで同日登頂し、最年少・最高齢記録を更新した。もうこの辺で高所遠足の年齢競争にはピリオドを打ってもらいたいものだ。(山森)

事務局日誌 (5月)

- 12日 (月) ヒマラヤ379号発送
 15日 (木) ニンチン・カンサ トレッキング不成立を申込者2名へ発送
 16日 (金) 馬場保男さんの新しい門出を祝う岳人の集い (於、エミール、山森)
 24日 (土) HAJ理事会 (於、ルーム、山森、野沢井、古関、岩崎、中川、睦好)

HAJ通常会員総会 (於、かんぽヘルスプラザ東京 (名))

機関誌「ヒマラヤ」編集会議 (於、かんぽ、山森、野沢井、古関、岩崎、中川、睦好)

26日 (月) 東京集会 (13名)

30日 (金) 登山医学研究会幹事会 (於、弥生会館、山森)

31日 (日) 第23回登山医学シンポジウム (於、弥生会館、山森)

ヒマラヤ No.380 (7月号)

平成15年6月10日印刷 15年7月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キヤラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

最新
クライミング技術

ジム・グレンのフリークライミングをルビビッチ・アルバイン・ビッチャーから、最新のクライミング・ムーブメントまで、その歴史を単なるテクニカルでなく、その歴史や、環境保護までを含めて詳しく解説。実践的なクライミングのノウハウ、心構えなども細かくアドバイス。

菊地敏之 著

1600円

山小屋の主人の
炉端語

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取っ置きのお話。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ
山の気象と救急法

「飛騨高山の花博」として知られる著者の、山の花見術入門書。

飯田睦治郎 著

1359円

すぐ役立つ
記念日の山に登ろう

山の花見術入門書。

石井光造 著

1300円

すぐ役立つ
山のメモ帳

「岳人」連載の「山の雄学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のワンちゃんを深め、安全登山の指針となる一冊。

岳人編集部編

1400円

中高年の雪山入門

低山から夢のヒマラヤまで、トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しむ一冊。

福島正明 著

1600円

花と歴史の50山

「花と歴史の山旅」の第2弾。花の山々を訪れた珠玉のエッセイ集。

田中澄江 著

1359円

女性ガイドの
しなやか登山術

常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける。女性登山ガイドのノウハウな登山講座。

樋口英子 著

1500円

新・山靴の音

潤滑をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山
なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

登山の
運動生理学百科

「たづねたら合理的で安全な登山ができるのか」をテーマに中高年登山実績を踏まえて分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

今まで数多く発行された山書、何を读んだらいいか。そんな時の指針として「岳人」連載時的好評。

河村正之 著

1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外資部(メルオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004